

03

話題提供者
北海道旭川東高校
教諭・3学年主任
松井恵一

まつい・けいいち 教職歴 24 年。同校に赴任して 18 年目。地理歴史・公民科。同校で 5 年にわたって進路指導部長を務めた。

生徒の期待に応える「アップデート」を

先行きの見通せない臨時休業下、高校生は自分の生き方、そしてこれからの教師との関係について考えを深めました。前回、「これからの学び」について語ってくれた 2020 年度卒業生の父である松井恵一先生が、娘の言葉のバトンを受け取り、「これからの学び」についての思いを語ります。

学びをつくる当事者意識を持ち始めた生徒

2020 年度、私は北海道旭川東高校の 2 学年主任を務めましたが、この学年団でも様々な学校行事が中止・縮小となりました。ただ、例えば、「受験への意識づけ」を目的とするような行事が行われなくても、生徒たちは時機を捉えて自ら意識改革を起こし、成長していたように思います。あたり前があたり前ではなくなったからこそ、目の前の時間にしっかりと価値を見いだせるようになったのかもしれません。当時 3 年生だった娘は、「見えていなかったものに気づくことができた」と言いましたが、多くの生徒がそうした成長を果たしていたように思います。

娘は、学校の学びの中でも、見えていなかったものが見えるようになる経験はできると話していました。まさに、学んだ知識を使って何ができるようになるのが大事だと思ったのだと思います。だからこそ、ただ教師の話聞き、教えられたことを覚えるだけの学び方では不十分だという気づきが確たるものになったのでしょうか。娘のように、教えられるだけ、そして覚えるだけでは得られない学びがあることに気づいた生徒たちは、生徒と教師の役割がはっきりと分かれているような従来の授業スタイルに違和感を覚えるようになったのではないのでしょうか。娘が、生徒と教師を、同じ学びの空間を共有し、一緒に学びをつくっていく関係なのだと考えるようになったことは、何よりうれしかったです。娘が学びをつくる当事者意識を持っていると分かったからです。

変化を躊躇した時、生徒の考えを聞けばよかった

ただ、私たち教師は、生徒が求めていることに十分に答えられていないということも痛感しました。娘が、学校のあり方も、生徒と教師の関係も、もっと変わらなければいけないと考えたように、私も、変わらなければいけないことは多いと思いましたし、多くの教師が臨時休業を経験する中で、変化していく覚悟を持ったはずですが、しかし、実際には、コロナ禍で大きく変わった学校もあれば、いつの間にか元に戻ってしまった学校もあります。

今、私たちが育てたい生徒は、変化に柔軟に対応できる生徒です。しかし、学校という場がこれまでのスタイルにこだわりすぎるのなら、そのような生徒を育成することは困難でしょう。臨時休業中、私たちはオンラインを活用した授業の実施に躊躇しました。それは、生徒全員に平等に同じ環境を用意できないまま、オンライン授業を始めてよいのかという迷いがあったからです。生徒に、「インターネットに接続できるデバイスを全員が持っているわけではないけれど、どうすればよいと思う?」「どんなふうにオンラインを使えばよいと思う?」などと尋ねることもありませんでした。生徒に聞いてみれば、よりよいアイデアが出たかもしれませんし、学びに対する生徒の主体性を引き出すことができたかもしれないかと、今は思います。

過去を土台にアップデートを続けたい

変わることを怖がっているから、生徒と教師の関係、学校での学び方が変わらないのではないかという娘の指摘は、その通りだと思います。学校に限らず、どんな組織、集団も、「変わらなければ!」と急かされ続けると疲弊してしまいます。それは、「変わる」という言葉が、自分たちが歩んできた過去を否定しているように聞こえるからではないでしょうか。

生徒も教師も、これからの社会を考えた時、今までと同じ学校、教育では不十分であることは分かっています。でも、変わるのはいやほや怖いし、どう変わればよいのか、明確な答えがあるわけでもありません。そんな私たちに求められるのは、「アップデート」してみようという気持ちではないでしょうか。これまでの積み重ねを土台にしながら、しかし、今までとは違う一歩を踏み出す、そんなイメージです。

娘も理解している通り、旭川東高校のような学校では、今後も「大学受験」は避けては通れないテーマです。しかし、第 1 志望大学の合格をかなえながら、見えないものに気づく力のような、これからの社会で求められる資質・能力を養うことは可能だと私は思います。例えば、生徒の高校 3 年間の成長のゴールを、「受験の当事者になる」から「社会で生きる当事者になる」へと転換することで、教師の役割は指導者から支援者へと変わり、授業の進め方や生徒の勉強の仕方がアップデートされていくでしょう。生徒が生きる未来と、そこでの生徒の姿をイメージすれば、学校の学びも具体的に変わっていくはずだと、私は考えています。そして、そうしたアップデートを望んでいる人は、学校には何人もいることを、娘は感じ取ったのではないのでしょうか。

アップデートを重ねながら、学校は着実に変わろうとしているよと、娘に話したいと思います。